

創建

そうこん

巻頭言／千葉正裕・1

福島県建築文化賞受賞／阿部直人・2～3

日本大学工学部学術研究報告会特別講演・4

日本学術振興会特別研究員採用報告・5

修士学位論文／卒業研究発表会プログラム・6

卒業設計作品展・講評会／コンクール・展示会等出展作品・7

卒業式・修了式の表彰者／学術論文／教室ニュース・8

2008・3・25 VOL.42 NO.3 (通巻124号)

■ 日本大学・工学部・建築学教室 ■

■学力よりも人間力■

就職氷河期が終わりつつある今、バブル並みの採用動向が期待されています。しかし、景気が回復傾向にあるからと言って、すべての企業で採用枠を広げているわけではありません。

人材を確保することは、企業にとって大きな投資の一つ。ただ単に人手を補うためだけではなく、企業の生き残りをかけて採用に踏み切っている場合がほとんどです。もちろん中途採用者のような即戦力を求めることはないにしても、その会社で活躍できる素養や可能性を持った人材を見つけるために、採用にあたっては、成績よりも人間性、履歴書よりも面接を重視する傾向にあります。

そこで必要になってくるのが、人間としての魅力、すなわち人間力です。人間力というのは、社会的なマナーや、人と接するときのコミュニケーション力、TPO (Time Place Occasion) を考えた身だしなみなど、より円滑な人間関係を築いていくうえで必要不可欠なものです。

人間力をアップするためには、人として“できて当たり前のこと”を日頃から実践していくことが大切です。例えば、目上の人に友達言葉を遣ったり、簡単だからという理由だけで、どんな用件もメールで済ませたりはしていませんか。マナーにしても言葉遣いにしても、ふだんから気をつけるようにしていれば、就職活動で慌てる必要がありません。

ある企業では、面接の前に簡単なアンケートを実施しているのですが、人事担当者によると、当日の日付を何も見ないでスラスラと記入している学生は、評価がプラスになるそうです。

大切なのは、日常の自分です。日常の自分が、就職活動での自分になり、就職活動で得たものは、すべて

社会に出てから役立ちます。ほんの少しの心がけで、就職活動がぐんとスムーズになるはずですから、学生諸君も自分の人間力に磨きをかけていきましょう。

■行動につなげる能力■

大学生活の中では、「自分はこれをやった」と自信を持って言えるようなものを見つけることも大切です。ナンバーワンよりもオンリーワンとはよく言ったもので、いわゆる“一芸を持った人”が有利になる場合が多く見受けられます。

よい人材には、内定が集中するものです。研究でもよいし、サークルでもよいし、語学（英語）でも構わないので、自分の中に何か一つ「こ

就職を意識して 自分力を高めよう

教授 千葉正裕

れをやった」というものがあると、大きな自信につながります。

ちなみに最近は「コンピテンシー (competency) 面接」というものを取り入れる企業が増えてきました。直訳すると「能力」ですが、ただの能力ではなく、「行動につなげる能力」——言ってみれば、成果を上げる（結果として何かの結論を見出した）行動をこれまでに「したことがある」か、あるいは“している”かが問われるものです。

大学生活の中で、自分のオンリーワンを見つけるためには、日常的に「見て、聞いて、感じて、行動する」ことが大切です。まずは行動しなければ、何も生まれません。常に就職を意識しながら、大学生活を送るようにすることで、自分自身の新たな可能性が見えてきます。

■就職はお見合い結婚■

就職は結婚、特にお見合い結婚にたとえることができます。学生と企業が実際に会って、お互いに十分理解し合うことにより、初めて成り立つものです。その意味でいうと、第一印象だけで入社したり、単に「好きだから」という理由で入社するのではなく、相手のことをよく見極めることが重要です。業界研究や企業研究と呼ばれるものがそうです。業界研究や企業研究にあたっては、常に変化し続けている社会状況にアンテナを張りながら、現状だけではなく、今後の業界・企業動向まで見極めるようにしてください。昨日の勝ち組が、今日には負け組になってしまったなんていうことが、現実に行き起きている世の中ですから。

最近は企業の採用活動も早期化・多様化しているため、早い段階から就職活動の準備を始めることも大切です。夢を形にする仕事に就きたい——。そんな思いから、建築学科を志した人も多いでしょう。施工管理の仕事に就いた卒業生からは、建物の基礎から完成まで携わることができるので、「自分が造った」という実感が湧き、やりがいを感じ、大変だけど充実して楽しいという話をよく聞きます。現場がキツそうだから他の仕事がいいとか、実家から通える仕事だから等の事由を優先した人からは、思い描いていた仕事とのギャップに悩み、苦勞しているとの相談を受けることもあります。

君たちにとって、就職はゴールではなく、むしろ新たなスタートラインです。そのスタート地点を自らの力で切り開いていくのが就職活動です。大学生活の中で、できるだけ早い段階から就職を意識し、自分だけの人間力である「自分力」をさらに高めていってください。

(就職指導副委員長)

祝・福島県建築文化賞ダブル（優秀賞、特別部門賞）受賞記念



自らのプログラムによって建築を構想する

「福島県消防学校」「郡山市立三穂田中学校屋内運動場」

阿部直人

優秀賞受賞作品「福島県消防学校」

消防学校は福島市荒井にあった既存施設を建替えて、近年の急激な都市化、複雑多様化する災害に対する確かな判断力と迅速な行動力をもった消防士を育成し、防災意識の啓発及び教育の充実を図ることを目的に整備されました。

平成9年に福島県で初めて行われた県内限定の設計者選定プロポーザルで設計者に選ばれ、平成17年に完成するまで3期工事にわたり、竣工した建物を見ながら次の建物を設計するという理想的な時間のかけ方でじっくり関わることができました。

敷地は西に雄大な表情を見せる安達太良山や吾妻連峰、東に福島市内を見下ろす山裾にあります。この施設を利用する人々が、授業や訓練や集団生活を営むために場所を変えながら移動を続ける、その時に自分以外の他者の存在と大いなる周囲の自然を感じとれる建築の仕組みをつくりたいと考えました。

「管理・教育棟」、「宿泊棟」、「体育館・屋内訓練場」が中央広場をコの字に囲むように配置し、馬蹄形をしたパッサージュがグラウンドから始まり3つの棟を突き抜

けながらまたグラウンドに戻る構成としています。さらに敷地の緩やかな山裾の傾斜に合わせて断面の計画をしたことで造成工事費を抑え、微地形として建築内部に現れてくるスロープや階段、スキップフロアなどが傾斜地に建っていると感じさせます。

管理・教育棟を通る幅の広いパッサージュはホールやラウンジなどの人が溜まれる場所をつくり出し、正面入口付近では両面のカーテンウォールによって奥の広場や風景まで見通すことができます。この棟は建築それ自体が教材となり空間体験が身体記憶として残ることを期待して、4種類の構造形式を用いて素材をそのまま表し、吹き抜けやトップライト、ブリッジ、半地下などさまざまな特徴ある空間を散りばめています。

宿泊棟は移動の拠点であると同時に、消防活動に要求される『連携』を身につける集団生活のベースキャンプです。中央を通る吹き抜けをもったパッサージュが30室の個室（4人部屋）と食堂、浴室、図書コーナーなどを立体的に結びつけながら、あちこちに談話のためのコミュニケーションラウンジをつくりだしています。



管理教育棟：正面入口付近パッサージュの様子



左から管理教育棟、宿泊棟、体育館・屋内訓練場棟

プロフィール

1956年 福島県郡山市生まれ
 1978年 法政大学工学部建築学科卒業
 1981年 (有)富永譲＋フォルムシステム設計研究所入社
 1983年 9ヶ月間ヨーロッパに渡り、建築を見て歩く
 1989年 阿部直人建築研究所設立
 2002年～ 日本大学工学部非常勤講師
 2003年～ 国際アート&デザイン専門学校非常勤講師

受賞暦 (括弧内は受賞作品名)

1997年 第1回郡山市さわやか建築賞優秀賞 (くに屋)
 1998年 第16回福島県建築文化賞特別部門賞 (くに屋)
 2002年 第6回郡山市さわやか建築賞優秀賞 (並木の家)
 2006年 第9回郡山市さわやか建築文化賞・優秀賞
 (池ノ台の家)
 2007年 第10回郡山市さわやか建築文化賞・奨励賞
 (郡山市立三穂田中学校屋内運動場)
 2007年 第26回福島県建築文化賞優秀賞
 (福島県消防学校)
 福島県建築文化賞特別部門賞
 (郡山市三穂田中学校屋内運動場)

特別部門賞受賞作品「郡山市立三穂田中学校屋内運動場」

設計を始める時に学校の体育館という機能に合わせて、何か子供たちの行動や交流が(地域を含めて)より活発になるようなつくり方ができないかと考えていました。

敷地をじっくりと見てみると、道路側にある校門と既存校舎の昇降口をまっすぐ結ぶ接線上に体育館の端がくることが分かり、そこを玄関として大きな屋根をかけ、通り抜けられるアプローチプラザという半外部空間をつくろうと思い立ちました。

この三穂田地区は強い西風が吹くために、子供たちが体育館の脇を通る時に巻いた風が吹き付けたりしないように大きな屋根を掛けて、しかも西風を逃がすような形態で屋根をつくることは理にかなっていませんでした。加えて屋根に降った雨水の約3/4を東端のコンクリートの大樋で受けて地下に貯め、災害時の中水として利用できるようにしています。

外部のラウンジのようなこの空間は、登下校時や部活動になると生徒達で賑わい、その他に雨天時グラウンドが使えない場合の練習スペース、交流試合に訪れた他校の生徒や保護者の居場所、壮行会などのイベント、地域

住民が体育館を利用する際のコミュニティの場としてなど様々に利用されています。体育のための施設にとどまらず、さまざまな学校活動や地域活動に広く利用できる施設にすることができました。

内部のアリーナは3面の連続窓によって空間を上下に切り分けています。ギャラリーから下は木材による仕上げで、人の体が当たる部分の安全性を確保しながら外のアプローチプラザの様子が分かるように一部を格子戸とし、上部は鉄と木によるハイブリッド梁が露出して『スポーツ』がイメージさせる軽やかさを感じられるようにしています。

どうしても学校の体育館はみんな同じような形態になりやすいと言われがちですが、敷地の特性や地域性を良く見つめていくことでそれぞれのプログラムに適した建築ができるのではないかと思います。

(阿部直人建築研究所代表・非常勤講師)



北側(道路)外観：西風を逃がすような屋根の形態



南側外観：既存昇降口からアプローチプラザを見る

第50回日本大学工学部学術研究報告会特別講演

「建物の地震対策－耐震化のすすめ－」（岡田恒男氏）を聴講して

大学院修士課程1年 志賀竜太

第50回日本大学工学部学術研究報告会特別講演は、12月8日に70号館7014教室にて、岡田恒男氏による「建物の地震対策－耐震化のすすめ－」と題して開催された。

講演では、阪神・淡路大震災の被害状況と、その教訓を基に取り組みられてきた建物の地震対策について、事例を交えながらわかりやすく解説されていた。

本稿では、今回の講演内容である新築建物、既存建物および被害建物に関する地震対策について報告する。

「新築建物に関する地震対策」

我が国の建築に関する法律は、大地震が起こると共に改正されてきた。2000年に改正された建築基準法では、性能設計法が耐震設計に導入された。性能設計法とは、設計時に建築主と構造設計者との間で建物の性能をどの程度にするか事前に決め、その目標性能を満たす建物を設計者が設計するというものだ。

その発端になったのが、1995年に起きた阪神・淡路大震災である。この地震では、建物が倒壊したり、甚大な被害を受けた建物が多く見られた。しかし、これらの建物の多くは、1981年に行われた耐震基準に関する大改正前の建物であり、これ以降の新耐震基準で建てられた建物の被害の程度は軽く、倒壊するような建物は少なかった。

では何故「性能設計法」が導入されるようになったのだろうか。新耐震基準で建てられた建物は、建築基準法で定められた耐震性能「大地震に対しては、損傷はあるものの崩壊・倒壊を防ぎ人命は守る」を満たしており、設計者側から見れば十分な設計である。しかし、一般の人からは、「ここまで壊れるとは思わなかった」という意見が聞かれるなど、建築基準法そのものの見直しが必要となり、性能設計法が導入されることになった。

設計した建物が要求された性能を実際どの程度満足できるのかは、今後の実績からでしかわからないと思う。しかし、地震が起きたときに家を失わずにすむということは、地震対策として重要なことだと思った。

「既存建物に関する地震対策」

阪神・淡路大震災では、新耐震基準以前の建物の多くが崩壊・大破の被害を受け、その大半が古い木造住宅であったと報告されている。この教訓から、1995年に耐震改修促進法が施行され、新耐震基準を満たさない建物について積極的に耐震診断や耐震補強を進めるとされた。しかし、この法律は、学校や病院等の不特定多数の人々が利用する建物を対象としており、住宅が対象に含まれるようになったのは、2006年に施行された改正耐震改修

促進法である。しかし、それまでに10年が経過し、その間に発生した大きな地震による建物被害を思い起こすと、既存建物への対策が非常に遅れていると感じた。

「被害建物に関する地震対策」

阪神・淡路大震災では、日本で初めて応急危険度判定が実施された。しかし、判定士の数と質、資機材、指揮・連絡体制等の準備不足のため、判定に2ヶ月の期間を要し、応急危険度判定組織の整備不足が明らかになった。この教訓から、1996年に応急危険度判定協議会が設立され、同年には応急危険度判定士制度が各都道府県に普及した。

私は、聴講するまで、応急危険度判定がどれだけ重要なのかを理解していなかった。しかし、講演中に紹介された応急危険度判定の海外の実施例では、地震発生後の素早い応急危険度判定により、マンションが崩壊する前に住民を避難させることに成功していた。そのマンションは、地震発生の翌日に一部を残して崩壊したが、住人は誰一人巻き込まれることはなかった。

私は、新築や既存の建物の耐震性能を高めることだけでなく、余震による二次災害を防ぐためにも、応急危険度判定の普及は重要な地震対策の一つなのだと感じた。

応急危険度判定の成功例（1985メキシコ地震）



地震直後（隣棟）



地震翌日（住民避難後）

今回の講演を通じて、普段わからない、法律ができるまでの経緯を知ることができた。そして、これらがどのような目的で作られたのかを知ることにより、法律に対する理解をより深められ、有意義な機会を得られたと思う。地震対策は、建物に関する対策だけでは不十分であり、ライフライン等を含めた総合的な対策がもっと必要であると思う。私達が地震に怯えずに暮らせる社会が到来する時が来ることを期待したい。

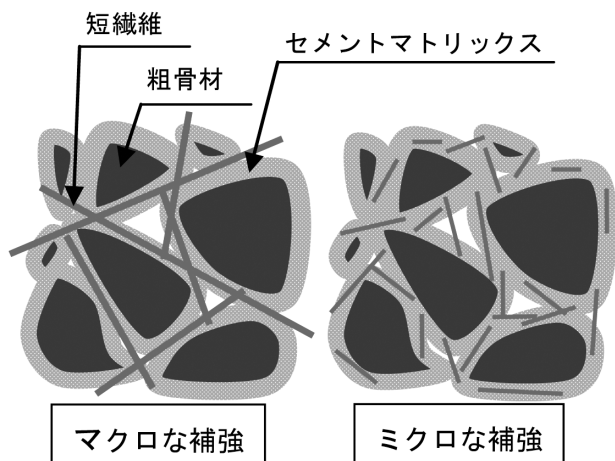
日本学術振興会特別研究員採用報告

「日本学術振興会特別研究員」採用に至って

大学院博士課程2年 齋藤俊克

日本学術振興会の特別研究員に、平成20年度から2年間採用されることになりましたので、報告致します。この特別研究員とは、「優れた若手研究者に、その研究生活の初期において、自由な発想のもとに主体的に研究課題等を選びながら研究に専念する機会を与えることは、我が国の学術研究の将来を担う創造性に富んだ研究者を育成する上で極めて重要なことである」という趣旨から生まれたものです。

私の研究テーマである「繊維補強ポーラスコンクリートの開発」について説明します。近年、地球環境を考える中で、Sustainable Developments（持続可能な開発）が叫ばれ、建設業界では、エコマテリアルとしての観点から、ポーラスコンクリートの利用に関して様々な研究報告があります。ポーラスコンクリートとは、コンクリート内に水や空気を通す連続空隙を設けた「雷おこし」のような材料です。この連続空隙を活かした使い方をすることにより環境負荷低減に貢献できるという観点から、屋上緑化、水質浄化、透水性舗装などに広く使われはじめています。しかしながら、ポーラスコンクリートは、粗骨材が点接着した組織構造であることから、機械的性質及び耐久性が欠如しやすい欠点を有しています。それらの改善策としては、結合材強度の向上、ポリマーの混入、繊維の混入などがあります。従来のポーラスコンクリートにおける繊維補強の考え方は、粗骨材最大寸法より短い繊維を用いるミクロな補強であったため、良好な試験結果が得られていません。本研究の補強方法は、下図に示すように、粗骨材間を架橋する長さを持つ短繊維の混入によって、ポーラスコンクリートの組織をマクロに補強することにオリジナリティーがあり、これまでに、このような繊維補強に関する研究報告は見当たりません。

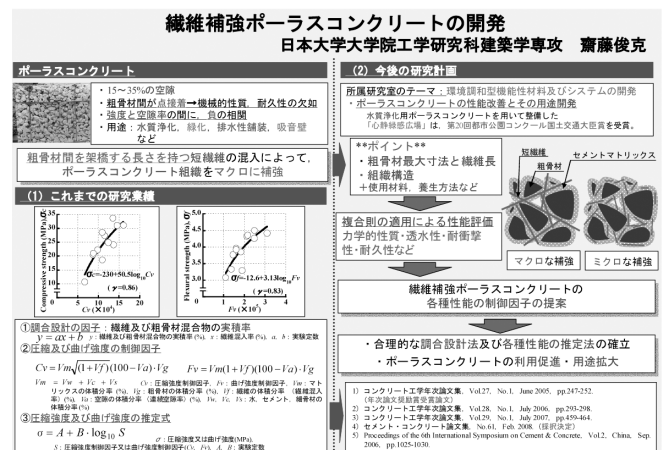


繊維補強ポーラスコンクリートの概念図

次に、採用までの流れについて報告します。まず、書類審査があり、現在までの研究状況、これからの研究計画、研究業績、自己評価などを記述した申請書を提出します。その内容を申請者の分科細目に応じて、1人当たり、審査会の専門委員6人によって審査を行います。その結果、面接免除の採用内定者及び面接候補者が選定されます。私は面接候補者に残りました。次に、面接候補者はA0版のポスターを作成し、その内容について、発表（4分）及び質疑応答（6分）を面接官の前で行います。私は、これまでに学会発表を複数回行っていたが、パワーポイントを用いるものが全てであったため、ポスター発表という形式にとっても戸惑いました。また、4分という短い時間の中に伝えたいことを凝縮する作業は、困難を極めました。更に、面接日が近づくにつれて、極度の緊張から眠れぬ日々が続きました。面接当日、会場である東京都千代田区の弘済会館には、A0版のポスター（大きいので目立つ）を持った人で溢れかえっていました。会場に入り、それらの人達を観察すると、自分と同じ人がたくさんいることがわかり、緊張が解け、面接では落ち着いて研究内容をアピールできました。

これらの選考過程を経て、採用に至った訳ですが、工学部で初ということで喜びも倍増しました。今後は、研究者として、日本大学工学部と特別研究員の名に恥じぬよう研究に邁進していく所存です。

最後に、私が特別研究員に採用されたのは、卒業研究生から現在に至るまで、文章の書き方から研究手法といった研究者に必要なスキルを幅広く、懇切丁寧にご指導頂いた出村克宜教授なしにはありえません。この場を借りて、深く感謝の意を表します。また、共に研究を行ってきた建築化学第2研究室の後輩諸氏に感謝の意を表します。



発表に使用したポスター

平成19年度 日本大学大学院工学研究科建築学専攻 修士学位論文発表会

日時：平成20年2月18日(月) 場所：日本大学工学部 70号館 7061教室

1. 台所流しにおける水栓の使われ方の実態に関する研究 石井 睦子 (指導：若井 正一 教授)
2. 細長い平面形を有する建物の建物・地盤連成解析に関する基礎的研究 伊藤 慎也 (指導：千葉 正裕 教授)
3. 建築工事現場における労働災害からみた安全性に関する人間工学的研究 岡本 啓 (指導：若井 正一 教授)
4. 梁の形状解析に関する基礎的研究 片桐 俊之 (指導：倉田 光春 教授)
5. 竹補強セメントモルタルの基礎的性質 菊地 弘悦 (指導：出村 克宣 教授)
6. 地方都市中心市街地における提案型住環境整備 木村 勇介 (指導：狩野 勝重 教授)
7. ASI-Gauss法を用いた骨組の弾塑性解析に関する基礎的研究 末安 惟一 (指導：倉田 光春 教授)
8. 1自由度系への縮小・復元法に関する基礎的研究
杉山 和隆 (指導：倉田 光春 教授, Buntara S. GAN 准教授)
9. F県K市にみる土地利用状況の時系列的変化と土地環境の実態 鈴木 都秀 (指導：狩野 勝重 教授)
10. 梁の幾何学的非線形解析に関する基礎的研究
高澤 伸弥 (指導：倉田 光春 教授, Buntara S. GAN 准教授)
11. 標準重量衝撃源による床衝撃音と生活行為音の対応に関する実験的検討
橋本 慧一 (指導：濱田 幸雄 教授)
12. 住まいにおける食卓まわりの家族の着座特性に関する検討 橋本 健太 (指導：若井 正一 教授)
13. 建具の遮音性能測定に影響を及ぼす要因に関する研究 溝口 紗世 (指導：濱田 幸雄 教授)
14. 粘弾性理論に基づくフレームの解析に関する研究 柳川 雅嘉 (指導：倉田 光春 教授)
15. せん断応力・せん断変形を考慮した梁の解析法に関する基礎的研究 渡邊 要介 (指導：倉田 光春 教授)

平成19年度 日本大学工学部建築学科 卒業研究発表会

日時：平成20年2月1日(月) 場所：日本大学工学部 70号館 7014教室 (五十嵐ホール)

1. 短繊維補強ポーラスコンクリートの開発
有岡 大輔, 安齋 秀亮, 後藤 真治, 佐藤 圭太 (指導：出村 克宣 教授)
2. 斜補強筋および鋼繊維補強高強度コンクリートを用いたRC造柱・梁接合部の弾塑性挙動に関する実験的研究
寺田 健一郎 (指導：Sanjay PAREEK 専任講師)
3. 複合立体トラス構造物の解析法に関する基礎的研究 —複合平面トラスの開発と解析—
川西 拓人, 菅野 泰和 (指導：倉田 光春 教授)
4. 細長い平面形を有する建物の立体振動解析 阿部 鉄也 (指導：千葉 正裕 教授)
5. 鋼構造部材の簡易型継手の開発に関する研究 宮口 規章 (指導：浅里 和茂 准教授)
6. 制振装置に関する基礎的研究 —U字形水槽によるスロッシングダンパの実験と効果確認—
田中 文崇 (指導：Buntara S. GAN 准教授)
7. 個別要素法による歩行者の動線計画シミュレーションに関する基礎的研究
君島 一喜 (指導：野内 英治 専任講師)
8. 就寝まわりの生活実態に関する調査 —住まいにおける寝具の使用実態について—
長谷川 雅人 (指導：若井 正一 教授)
9. 地方都市中心市街地の再構築手法に関する研究 —K市中心市街地における将来予測手法の検討—
嶋谷 仁 (指導：狩野 勝重 教授)
10. アーケードのある街路の空間構成に関する研究 —仙台アーケード2007—
鈴木 克昌, 川俣 裕一, 後藤 正和, 内田 有香 (指導：三浦 金作 教授)
11. 児童の遊び場に関する調査研究 関谷 富和, 広瀬 優, 廣川 卓 (指導：土方 吉雄 准教授)
12. 戸建住宅の改修履歴の実態に関する調査研究 —福島県内戸建住宅団地の住宅改修履歴—
裊岩 豊 (指導：松井 壽則 准教授)
13. オープンスペースをもつ小学校における児童の環境行動に関する研究
富永 美香, 藤崎 美代子, 三浦 泉 (指導：市岡 綾子 専任講師)
14. 一般開放性を重視した劇場・ホールの利用者空間に関する研究 比佐 剛史 (指導：浦部 智義 専任講師)
15. 地方都市における避難施設の現状と課題 西田 桂子 (指導：濱田 幸雄 教授)
16. 設備施工現場に関する研究 —給排水衛生設備の過去・現在— 柿沼 良幸 (指導：八町 雅康 専任講師)

平成19年度卒業設計作品展・講評会

平成20年2月13日(水)に、平成19年度建築学科卒業設計作品展における講評会が、70号館1階の7012室と7013室を使って行われた。非常に大きなスペースを用いた講評会、設計指導を担当される非常勤講師の方々も参加された選考会議など、初の試みということもあり、かなり試行錯誤しながら行った感じであったが、結論からいうと、概ね満足できる講評会であった。

講評会に際しては、前年度までの講評に関する反省を基に、①設計趣旨等について学生と教員が意見交換する時間を十分に確保すること、②講評ならびに審査する教員が見回りやすい作品展示とすること、以上の2項目を講評会の基本方針として検討した。午前中10～12時の2時間は、提出・展示された25作品の前に各学生が待機し、ポスターセッション形式で会場を巡回する教員等の要望に応じて個別に質疑応答を行う時間をとると共に、人だかりができるような局面では展示作品を大型スクリーンに投影させ人の分散を考えた。

午前終了時に、午後のプレゼンテーションに相応しい作品を各教員が5作品程度選定することとし、その集計結果で高得票の11作品を選出した。

午後は、1作品15分(発表5分・質疑10分)程度で順次プレゼンテーションを行った。敷地選定と設計コンセプトの整合性、選定した敷地のコンテクストへの解釈度、設計プログラムとデザインとの関連性、構造上の問題点、模型表現に関する評価、図面情報不足の指摘など、各作品に対して熱のこもった質疑・示唆に富んだ指摘等があり、予定時間を超過して16時30分頃まで実施された。

その後、桜建賞や様々なコンクール・展示会等への出展作品を決定する選考会議を行い、全てが終了したのは17時30分頃となった。ほぼ丸一日の長丁場で、やや長いという批判もあるだろうが、学生が構想から半年(場合によってはもっと長いかも知れない)がかりで計画・設計した作品を講評・審査するには、25という作品数を鑑みると妥当な時間ではないかと思う。

近年の卒業設計では本学のみならず全国的に、模型の巨大化・図面の低密度化が話題になっている。それに対し、もちろん賛否両論ある。いずれにしても、豊かな発想・説得力のあるコンセプト・美しく見せる表現力・建築らしい図面・空間表現された模型等々、何を評価軸とするか、作品を評価する側が問われている難しいテーマであろう。

最後に、本年度卒業設計を選択された25名の学生諸君の作品にかけた情熱と労力に敬意を表すると共に、卒業設計講評会が多くの参加者により盛会に終了できたことに深く感謝申し上げたい。(卒業設計係：浦部、市岡)



平成19年度卒業設計コンクール・展示会等出展作品

■日本建築学会「全国大学・高等専門学校卒業設計展示会」

近藤 喜尚(指導：松井 壽則 准教授)

「つながるみらい

ー中核都市における生涯学習施設のネットワーク形成ー

■日本建築家協会「卒業設計コンクール2008」

元田 草太(指導：浦部 智義 専任講師)

「industrial design ー積層型工場の提案ー

■近代建築「卒業制作'08」掲載

樋口 諒(指導：浦部 智義 専任講師)

「変革について来れるか

ー裁判を題材に個人と社会の関係性を考えさせる建築ー

■レモン画翠「第31回学生設計優秀作品展」

太田 亮平(指導：浦部 智義 専任講師)

「脱縦割・横連続 ー廃墟ビル群をつめかえるー

■日本インテリア学会「第15回卒業作品展」

奥山 由衣(指導：松井 壽則 准教授)

「これから。を変える可能性

ーノーマライゼーションを実体化する新教育施設の提案ー

■学外展示作品9作品(2月14～17日、会場：ビッグアイ6階)

上記5作品のほかに、以下の4作品が展示された。

・岸 周(指導：浦部 智義 専任講師)

「Sports Studio ースポーツ空間を核とした建築群ー

・蔵原 和香子(指導：三浦 金作 教授)

「時代が教えてくれるもの

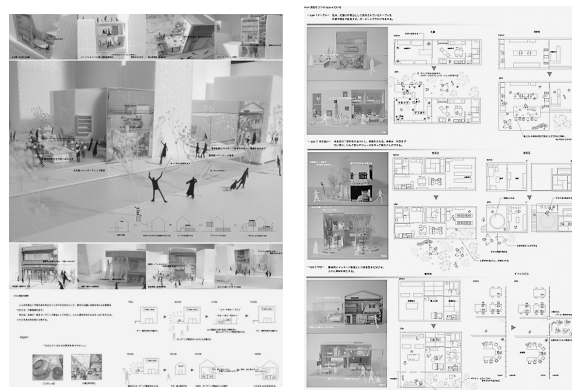
ー寄り道《庭》・抜け道《空地》・けもの道《道》ー

・渡邊 麗(指導：浦部 智義 専任講師)

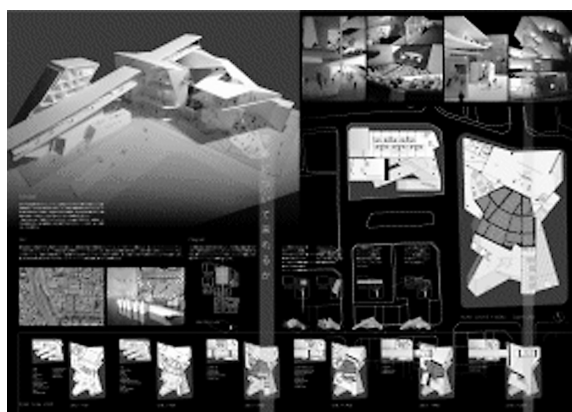
「世田谷線の車窓から ー日常移動ミュージアムー

・林 美矢子(指導：浦部 智義 専任講師)

「還 ー人口動態により変化していく建築ー



近藤喜尚君の作品



樋口 諒君の作品

平成19年度 卒業式・修了式における表彰者

平成20年3月25日

◇齋 藤 賞◇

修士論文「竹補強セメントモルタルの基礎的性質」

菊地 弘悦(指導:出村 克宣 教授)

◇北 桜 賞◇

修士論文「建具の遮音性能測定に影響を及ぼす要因に関する研究」

溝口 紗世(指導:濱田 幸雄 教授)

◇桜 建 賞◇

卒業設計「つながるみらいー中核都市における生涯学習施設のネットワーク形成ー」

近藤 喜尚(指導:松井 壽則 准教授)

卒業論文「短繊維補強ポーラスコンクリートの開発」

安齋 秀亮, 後藤 真治, 佐藤 圭太, 有岡 大輔(指導:出村 克宣 教授)

卒業論文「アーケードのある街路の空間構成に関する研究ー仙台アーケード2007ー」

鈴木 克昌, 川俣 裕一, 後藤 正和, 内田 有香(指導:三浦 金作 教授)

卒業論文「制振装置に関する基礎的研究ーU字形水槽によるスロッシングダンパの実験と効果確認ー」

田中 文崇(指導:Buntara S. GAN 准教授)

卒業論文「一般開放性を重視した劇場・ホールの利用者空間に関する研究ーさくらホールと茅野市民館ー」

比佐 剛史(指導:浦部 智義 専任講師)

◇優 等 賞◇

鈴木 拓也, 奥山 由衣, 川西 拓人

◇工学部長賞◇

学術・文化部門:岸 周

第11回JIA東北建築学生賞(日本建築家協会東北支部主催)最優秀賞受賞

作品名「立体路地」

学術・文化部門:藤崎美代子

第10回JIA東北建築学生賞(日本建築家協会東北支部主催)奨励賞・東北専門新聞

連盟賞受賞 作品名「COMPOSITIONー包み込むように・・・ー」

学 術 論 文

*届け出があった記事を掲載

■学術論文

・出村克宣, 山森雄介, 菊地弘悦, 「ポーラスコンクリート及び芝の水質浄化機能を応用した水循環による雨水の貯留・浄化システムの開発ーパイロットプラントの水質浄化性能の評価ー」, 日本建築学会環境系論文集, No.622, pp.81-87, Dec. 2007

・中山誠健, 積田洋, 浦部智義, 「建築空間における階段・スロープの設計者の言説に関する研究」, 人間・環境学会誌MERA Journal, 第21号 Vol.11 No.1, pp.54, Feb.2008

■出村教授は, 「未来材料」誌(株式会社エヌ・ティー・エス)の12月号に, 「建築と材料ーロハスの材料とシステムの開発ー」を寄稿された。

■土方准教授は, 12月3日, 福島県景観アドバイザー派遣事業により, 須賀川市南部地区景観協定の締結及び締結後の運営に対する助言を行った。

■出村教授は, 12月13日, 次期工学部長に選出(建築学科初)された。

■松井准教授は, 12月26日, 郡山市より郡山障がい者自立支援協議会委員を委嘱され, 会長に選任された。

■土方准教授は, 1月24日, 福島県より景観法を活用した景観形成施策に関する小委員会委員を委嘱された。

■松井准教授は, 1月28日, 福島県南会津建設事務所主催による「平成19年度高齢者等住宅改修講習会」にて, 基調講演と懇談会のコーディネーターを務めた。

■三浦教授, 浅里准教授は, 1月30

日, 郡山市教育委員会より郡山市総合運動場開成山野球場改修事業公募型プロポーザル・デザインビルド方式に係わる審査委員会委員を委嘱され, 三浦教授は委員長に選任された。

■松井准教授は, 2月4日, 福島県よりふくしまユニバーサル推進会議委員を委嘱され副委員長に選任された。

教室ニュース

■松井准教授は, 2月7日, 会津若松市職員研修の一環として開催された「ユニバーサルデザイン研修会」の講師を務めた。

■土方准教授は, 2月14日, 喜多方市より喜多方市都市マスタープラン等策定委員会委員を委嘱された。

■松井准教授は, 2月19日, 福島県喜多方建設事務所主催の「高齢者等住

宅改修講習会」にて基調講演を行った。

■松井准教授は, 2月20日福島県主催による「ユニバーサルデザイン・ふくしまビジネスフォーラム」にて, パネルディスカッションのコーディネーターを務めた。

■土方准教授は, 2月27日, 福島県景観アドバイザー派遣事業により, 阿武隈高原中部地域観光案内サイン報告会の基調講演を依頼され, 「サイン計画と観光」と題して講演した。

■土方准教授は, 2月28日, 郡山市より郡山市中心市街地活性化推進委員会幹事会幹事を再任された。

■浅里准教授は, (社)福島県建築士会より平成19年度福島県知事指定「建築士のための講習会」講師を委嘱され, 3月12日にいわき市にて, 13日に郡山市にて講演を行った。

■市岡専任講師は, 3月17日, 福島県より福島県環境影響評価審査会委員を再任された。